

平成二十七年
度
名寄市立大学
推薦入試・社会人選抜

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文を読み、あとの問に答えなさい。

情報には二種類あります。生の情報である一次情報と、誰かによって加工された二次情報です。新聞・雑誌の情報はすべて二次情報です。そして、一次情報は社会のなかに張り巡らせた人的ネットワークを通じてもたらされます。このルートが多様で太いものになれば、自然と新聞・雑誌の情報が既知のものとなっていくのです。

ただ、いきなりこのようなネットワークを築くことはできません。まずは、二次情報をしっかりと身に付けることです。二次情報すら把握していない人を、質の高い一次情報を提供してくれるキーパーソンは相手にしません。まずは数多くの二次情報を自分のものにしていくことが、一次情報のルートを築く第一歩となるのです。

もちろん、やみくもに多くの情報に触れても「武器」にはなりません。

人間の脳の容量には限界がありますから、あらゆる情報をインプットするわけにはいきません。頭に入れておくべき情報のみをインプットして、不要な情報は捨て去る必要があります。そして、意味のある情報を蓄積したときに、はじめて知識は「武器」になるのです。

そのためにもっとも重要なのは、「何のために知識をもつのか」「仕事を通して誰の役に立つのか」という目的をしつかりと持つことです。

(中略)

私は、「目的」に照らして本質的ではない情報はどんどん捨てています。

たとえば、人に聞いたり、何かで調べればわかることは、細かいことまでは覚える必要はありません。

日本にいくつ工場があるかなどといったことは、『工業統計調査』（経済産業省）をみればわかるのですから、いちいち正確な数字を覚えておく必要はないのです。細かい情報にやたらと詳しい“情報オタク”になったからといって、中小企業の役には立てるわけではないからです。

あるいは、専門分野の情報は深く掘り下げて頭に入れますが、周辺分野のことは「見出し情報」をインプットするだけで済ませます。たとえば、中小企業の動向や、中小企業に関する制度などについては詳細な知識を頭に入れますが、大企業の動向などはよほど重要なものでなければ詳細までは覚えません。「見出し」さえ覚えておけば、必要になったときにスクラップから引っ張り出せばいいのです。

こうして、「あれもこれも一応知っているけれども、深く知っているのは専門分野のみ」という形をつくっていきます。私は、これを「I型の情報インプット」と呼んでいます。Iの上部の横棒が「あれもこれも一応知っている」部分に当たり、縦棒が深掘りする専門知識に該当します。横棒を広げながら、

縦棒を深く掘り下げていくことをイメージすればいいでしょう。

ただ、実は、縦棒を深く掘り下げようとするれば、複数の縦棒が必要になってくることに気づきます。ひとつの専門性だけでは「目的」を達成できないからです。

私の場合であれば、中小企業の経営をサポートするためには経営学だけでは対応できません。自動車メーカーの下請企業の相談を受けたときには、自動車に関する工学的な知識も必要になります。あるいは、資金繰りに悩む経営の相談に対応するためには、金融や会計、税制などについても深く知っておかなければなりません。「I型の情報インプット」を徹底すると、徐々に「V型」に近づいていくのです。穴掘りにたとえるとイメージしやすいかもしれませんが。直径十センチの穴を十メートル掘りなさいといわれたら難しいですよ？ 十メートルの穴を掘ろうと思えば、広い範囲を掘り、少しずつ幅を狭めつつ掘り進みます。それと同じことです。

これは、あらゆる職業にあてはまることです。

飲食店で働く人であれば、お客さまに喜んでいただくためには、料理や飲み物についての知識はもちろん、接客の知識も必要でしょうし、ニーズを汲み取るマーケティングの知識も必要でしょう。経理担当であれば、簿記の知識を付けねばひとりの仕事はできるかもしれませんが、他部署の業務をバックアップしようと思えば、管理システムや現場業務に関する知識もある程度もっておく必要があるでしょう。

このように、V型の情報インプットを継続することによって、私たちは「なくてはならない存在」へとなることができるとは思います。

「V」という文字の下部が一点に収斂しゅうれんしていることに注目してください。つまり、ひとつの「目的」を達成するために複数の専門性を磨くことに意味があるのです。一点に収斂することのない、単なる「モノシリ」では、人の役に立つことはできません。「人の役に立ちたい」という根っこをしつかりもつことが大切です。

（強く生きたいと願う君へ）坂本光司著 WAVE出版二〇二二年 より）

問一 専門職が知識や情報を身に付けようとする時に配慮すべき姿勢や態度について著者はどう考えているか。二百字以内で説明しなさい。

問二 関連する他分野の知識や情報を専門職が幅広く学ぶことについて、あなたが考えることを六百字以上八百字以内で述べなさい。